

国語科教員養成課程で出会う『枕草子』(3)

坂東 智子

“The Pillow Book” as Teaching Materials for a Teacher Training course in *kokugo* [National language] (3)

BANDO Tomoko

(Received January 7, 2015)

キーワード：国語科教員養成課程、伝統的な言語文化の指導、枕草子、小中高連携教材

はじめに

クイズ「100人に聞きました」で、日本人成人に「春は」に続く言葉はと聞くと、間違いなく半数以上は、「あけぼの」と答えるだろう。それほどに枕草子の冒頭は日本人の美意識・季節感として定着している。そして、今後ますますこの傾向は強くなると推測される。

平成20年3月28日に告示された現行学習指導要領では、小中高の国語科に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設された。これに伴い、枕草子初段「春はあけぼの」は、平成23年度版小学校国語教科書全社に、平成24年度版中学校国語教科書全社に採録されている¹⁾。新教科書で学んでいる小中学校の生徒にとって、日本を代表する古典といえ、まずは「春はあけぼの」ということになる。100人中ほぼ全員が、「春は」に続く言葉はと聞くと「あけぼの」と答える時代が確実にやって来るのである。また、国語科教員を目指す学生達にとっては、将来小中高いずれの校種の教員になっても、教える可能性が最も高い教材が、枕草子初段ということになる。

筆者は、平成24、25、26年度の「国文学演習Ⅱ・国文学Ⅱ演習」（後期、学部2年）で、枕草子を演習教材とした授業を行っている²⁾。演習箇所は、前半7回は章段順ではなく、道隆生存中の中関白家隆盛期と薨去後の不遇期に分け、推定される記事年次順に日記的章段から教員が選定した。後半7回はグループごとに自由に選定してもらった。授業を担当して3年目の26年度に初めて、小学校コースの生徒が中心メンバーであるグループが、初段「春はあけぼの」を演習箇所として発表を行った。

受講生のひとは、授業後に次のような感想を記している。「『春はあけぼの』について、なじみのある分、下手に手の出しにくいところかなと感じていたのですが、小学生を対象とした指導案を作りたいという理由で、ここを選択されたというのは、意識が高いなあと驚きました。分かりきっているようでも、考え感じ調べることで、ますます深みの増す部分ですね。『あかつき』『あけぼの』『しのめ』など、ほんの少しの時間の違いを異なる言葉で表現できた昔の人は、今の私たちとはまったく違うように世界が見えていたのかもしれない。もっと豊かに繊細に自然の移り変わりを体で感じられたのかもしれない。今日の学習で、表現されたものの向こうにある、その人のその時代の独特な感覚をかいまみ、自分たちとの比較の中で様々なことを考えられました。（NTさん・女子）」誰でも知っている章段を演習箇所を選んだことに受講生皆が多少なりとも驚きを感じていた。しかし、演習発表を聞き、教員からの補足説明を聞いた後では、知っているようで知らなかったことを知り、先のNTさんと同様に様々なことを考える時間となったようだ。

そこで本稿では、枕草子初段を考察対象として取り上げ、国語科教員養成課程において知っておきたい知識を整理し、小中高連携教材としての「春はあけぼの」の教材価値を新たに見出していく。方法としては、まず、小学校・中学校教科書における枕草子初段の採録状況を調査し、学習内容や学習活動を明らかにする。さらに、古典文学研究の成果に学びそれを整理した上で、新たに、「あけぼの」の語誌という観点からの教材分析を行う。

1. 小学校・中学校教科書に採録の古典作品

1-1 採録された古典作品名と枕草子の本文箇所

平成23年度版小学校国語教科書、平成24年度版中学校国語教科書に採録された古典作品名と枕草子の採録本文箇所は、後掲表1の通りである。枕草子初段は、掲載学年や採録本文箇所に多少の異同はあるが、小学校・中学校ともに、全社の教科書に掲載されている。初段の掲載本文箇所は、小学校では、全段を掲載しているのは、学校図書・教育出版の2社のみである。「春・夏」のみを掲載しているのが三省堂・光村図書の2社、東京書籍は初段は「春」のみであるが他に枕草子から「九月つごもり」「ふるものは」の2章段を採録している。中学校では、三省堂が中学1年に初段「春」のみを掲載している。残りの4社、東京書籍・学校図書・教育出版・光村図書には初段全段が掲載されている。

表1 平成23年度版小学校・平成24年度版中学校教科書に採録の古典作品名と枕草子の採録箇所

発行	5上	5下	6上	6下	中1	中2	中3
東書	竹取・徒然・平家	枕(初段春・九月つごもり・ふるものは)			伊曾保・竹取・韓非子	枕(初段全)・徒然・平家・漢詩	おくのほそ道・論語・万葉・古今・新古今
学図	宇治拾遺・枕(初段全)				竹取・宇治拾遺・故事成語・万葉集	平家・徒然・論語	遠野物語・万葉・古今・新古今・枕(初段全・うつくしきもの・香炉峰の雪)・おくのほそ道
三省	平家(学びを広げる)・漢詩(学びを広げる)		徒然・枕(初段春夏)・枕(うつくしきもの)(学びを広げる)・おくのほそ道(学びを広げる)		故事成語・漢詩・枕(初段春)・平家・竹取	枕(うつくしきもの・五月ばかり)・徒然・平家	おくのほそ道
教出		竹取・平家・付録(源氏・伊曾保)	枕(初段全)・付録(おくのほそ道)		故事成語・東海道中膝栗毛・竹取	平家・枕(初段全・うつくしきもの)・徒然	漢詩・おくのほそ道・万葉・古今・新古今
光村	竹取・枕(初段春夏)・平家				故事成語・韓非子・竹取	枕(初段全)・平家・徒然	おくのほそ道・万葉・古今・新古今・論語・源氏

*小学校・中学校の検定済み教科書を発行している5社(東京書籍・学校図書・三省堂・教育出版・光村図書)はそれぞれ(東書・学図・三省・教出・光村)と略した。以下本稿では、この略称を用いる。

多くの先行研究が指摘することであるが、「今までの中学校の古文教材の定番といわれた作品、例えば『竹取物語』『徒然草』『平家物語』『おくのほそ道』等が、小学校にも採録されている」³⁾ことが分かる。なかでも、枕草子初段「春」は、小中学校の共通教材であり、初段全体が小中高の連携教材となっている。小学校ですでに出会った「春はあけぼの」を、中学校・高校で新しい発見を伴って出会わせるために、教師はどのようなことを知り、どんな活動を組織すればよいのか。小学校・中学校・高等学校の国語科教員には、小中高の指導の系統性を鑑みた枕草子初段の教材研究、教材理解が求められているといえよう。

1-2 小学校・中学校教科書における「枕草子」の学習内容

中嶋真弓(2013)は、小学校・中学校の教科書における「枕草子」の学習内容と学習活動について調査しその結果を報告している⁴⁾。本稿では中嶋の報告を踏まえつつ新たな調査項目として、教材が配置されている領域、解説文、コラムの有無やキーワード、写真、絵画等の有無を加え、後掲表2にまとめた。

表2 「枕草子」の学習内容・学習活動

発行	学年	単元名・教材名	学習内容・学習活動	領域	解説・コラムの有無とキーワード、写真・挿絵の有無
東書	5下	日本の言の葉 「古文に親しもう」	音読→現代との比較→季節ですばらしいと感じることを書き交流する	読む	解説(清少納言、作者の感じ方や考え方、現代のわたしたちとの比較)、写真3(春・秋・冬)
学図	5上	随筆を書こうわたし風「枕草子」	音読→自分ならではの「枕草子」を書き交流する	書く	てびき(1「枕草子」を味わおう 2 わたし風「枕草子」を作ろう)
三省	6	自由な発想で —随筆—	随筆を書き交流する	書く	日本の随筆として、徒然草と枕草子の書き出しが示されている。
教出	6上	日本語のひびきを味わう→随筆を書こう	音読→暗唱を発表し合う→随筆を書き交流する	読む	解説(日本の自然の特徴、四季、季節の小さな変化、細やかな心の動き、読み続けられる、変わっていく言葉、変わらずにある言葉、言葉に対する新しい発見)、写真、絵画
光村	5	声に出して楽しもう	音読	読む	解説(古典、読みつぐ、言葉のひびきやリズム、昔の人、今のわたしたち、移り変わる時代とその中を生きる人々のすがた)、絵画3
東書	中2	古典 枕草子	音読・暗唱→筆者の表現をまねて文章に表す	読む	解説(清少納言、平安時代、随筆、「をかし」の文学)、コラム(伝統的な美意識、四季、風物、共通理解)、絵画、古活字本
学図	中3	今に向かって 発見する言葉 枕草子	音読・朗読・暗唱	読む	解説(古今和歌集、季節や事物、受け継ぐ、感受性の型、清少納言、現代文学、発見、拡大)、絵画
三省	中1	伝統的な言語文化 言語文化にふれる	声に出して、さまざまな作品を読もう	読む	めあて(随筆筆者の気持ちや考え方を想像しながら読もう。)
教出	中2	【伝統文化】 随筆の味わい 枕草子・徒然草	筆者の考え方や感じ方を想像しながら作品を読む→書き出しを借りて文章に表す	読む	解説(随筆、徒然草、平安時代、鎌倉時代、自然描写、人間観察、読み継がれる、筆者独自のものの見方、筆者の考え方や感じ方)、絵画
光村	中2	広がる学びへ 古文 枕草子	自分の感じる四季の趣と比べる→自分流「枕草子」を書く	読む	コラム(清少納言、四季、趣、季節感、季節の好きなもの)、絵画

小学校では、光村のみが、音読を中心とした学習活動を設定している。解説には、「古典」「読みつぐ」「言葉のひびきやリズム」という言葉が見られ、音読することで竹取、枕、平家といった各時代を代表する作品に直接触れさせようと企図している。「昔の人」と「今のわたしたち」といった言葉で、現代との比較という観点を提示し、「移り変わる時代とその中を生きる人々のすがた」を古典を音読することで捉えさせ

ようとしている。解説文に書かれたものを、音読という学習活動を通して実感させようとしている。

小学校の光村をのぞく他の4社は、大きくは、「音読→現代との比較→季節ですばらしいと感じることを書き交流する」といった「読む」から「書く」へという流れで学習活動が設定されている。その中でも、学図・三省は、「書くこと」領域に枕草子を配置している。学図の「てびき」には、1「枕草子」を味わおう、2 わたし風「枕草子」を作ろうの2段階のステップが示されている。各ステップにはさらに細かいステップが具体的に示されている。学図の学習の流れを教科書にそってより詳しく表3にまとめる。

表3 学校図書5上 「随筆を書こう わたし風『枕草子』」⁵⁾の学習の流れ (下線は筆者が付記)

(めあて) 自分の経験を生かして書こう。 枕草子初段全文の提示 上段に原文、下段に現代語訳 (見開き2頁に枕草子初段全文)
1 「枕草子」を味わおう
・ 本文を季節ごとに声に出して読みましょう。
・ 口語訳を読んで、情景が思いうかぶ場面に線を引きましょう。そして、グループの中で出し合ってみましょう。
・ いいなあと思う場面を選んで、その理由を出し合ったり、書き写したりしましょう。
2 わたし風「枕草子」を作ろう
清少納言のように、みなさんも自分ならではの「枕草子」を書きましょう。まずは練習です。お題は「春」にします。
① 春の季節で、自分がいちばん好きだと思う時間と場所を考えましょう。
② めいめいが思うことについて、どんな時間・場所・様子が好きなのか、なるべくくわしく書いてみましょう。 * <けい子>と<たかし>の例を上段、下段に表にして提示。
③ 書き出したことをつないで、文章にしましょう。そのとき、何で好きなのか理由があれば、それを書き加えてもいいです。 * <けい子>と<たかし>の例を上段、下段に表にして提示。 比喩 (たとえる言葉) を使ったり、文末表現をくふうしたりしてみましょう。一つ一つの文を短くして書くと、歯切れのよい文章になります。
④ 他の季節のことを書いてみましょう。 * 「夏」についての文章が例示されている。
(まとめ) できた作品を読み合って、その友達らしいなあと思ったところを発表し合ひましょう。

「枕草子」を声に出して読むことを入り口として、自分ならではの「枕草子」を書く学習過程が、スモールステップを踏んで丁寧に示されている。「読む」から入り「書く」を出口とする学習の一つのモデルとなろう。中学校段階では、「枕草子」の文体の特徴や良いと思うところ、初段全体の構造といったことを自分なりの言葉で言語化させるという過程を組み入れることも有効であろう。

中学校では、5社全てが「読む」領域に教材配置している。東書・教出・光村の3社は、「読む」から「書く」へという流れで学習活動を設定している。それに対して、学図・三省は、音読中心の学習である。解説文等のキーワードを見ると、「随筆」「美意識」「共通理解」「古今和歌集」「受け継ぐ」「感受性の型」「発見」「拡大」「現代文学」といった小学校では見られなかった語が使用されている。古今和歌集で確立された美意識や感受性の型が、枕草子の新しい発見や表現によって拡大し、そういった表現の営為が現代文学にも受け継がれているという文学の流れや言語の連続性と変化変遷へと意識を向けようとしている。古典の言葉、表現を通してという所が肝要な点であろう。

2. 初段「春はあけぼの」の教材分析

2-1 学習者と枕草子との出会いを生み出すために

前節で考察したように、小学校と中学校では、「読む」から「書く」へといった同じような学習の流れであっても、達成したい目標は異なっている。中学校では、「枕草子」を「古今和歌集」から「現代文学」への流れの中に定位して捉えようとする視点が明確に示されている。さらに、古典の言葉、表現そのものにそれを求めようとしていることが分かる。

平成24年度版教科書『中学校国語3』(学校図書) 単元「発見する言葉—枕草子」には、枕草子から「春

はあけぼの」「うつくしきもの」「香炉峰の雪」の3章段が採録され、原文の前に、次のような解説文が掲載されている⁶⁾。(下線は筆者が付記)

『古今和歌集』は、その成立以降、人々の季節や事物の捉え方に大きな影響を与えてきました。春にはウグイスや桜を待ち、鳴き始めたホトトギスの声に夏の到来を感じ、秋には紅葉をめぐる——現代にも受け継がれているこのような感受性の型は、『古今和歌集』の成立以降に広まり、長く私たち日本人の心に定着してきたものです。

しかし、このような型に収まりきれない感受性を持ち、型を押し広げてより自由な表現を実現しようとする者が常に存在しました。その一人が清少納言です。このような表現の試みによって、文学は、新しい表現方法を発見し、表現対象を拡大し続けてきました。皆さんが触れている現代文学の優れた表現も、長い時の中でのこうした試み、発見、拡大を通して生まれてきたものです。

上の解説では、まず、『古今和歌集』における日本人の感受性の型の成立が述べられている。その後、それに収まりきれなかった感受性の持ち主の一人として清少納言を紹介する。『枕草子』における新しい表現方法の発見、表現対象の拡大と同様の試みが長い時の中で続けられ、現代文学の優れた表現を生んだと結んでいる。現代文学の表現や現代の言語生活がそうした流れ、積み重ねの中から生まれたことに意識を向けさせる解説内容である。

平成24年度版学校図書出版社『中学校国語3 教師用指導書 教材研究編(下巻)』、単元「発見する言葉 枕草子」の「1 学習目標と教材観」には次のような記述がある⁷⁾。(下線は筆者が付記)

中学校での古典学習指導は、かかる中等古典教育のカリキュラムを念頭に置いて、より深い学習理解、彼らの生きる力に関わる問題圏(例えば、ここでは感受性や思考力の拡大・再編・深化)と古典作品との接点の周到な解析を軸に問題圏に関わる知的体験の場を提供するものでありたい。「三大随筆の一つであり、特殊で新鮮な知性や写実性によって、後世に大きな影響を与えた作品」という従来の評価を学習者の体験として感得させると共に、そのような評価を定着せしめた根拠を作品の言葉と清少納言の営為に探り、学習者自身に自己の言葉と言語活動を振り返らせること、それを通して、「枕草子」との出会い、彼らの言語活動にとって意義あるものたらしめること。

中学校での『枕草子』についての知識としては、まず「三大随筆の一つ」であること、随筆というジャンルの嚆矢であることがあげられている。さらに、「特殊で新鮮な知性や写実性によって、後世に大きな影響を与えた作品」という教材観が示される。その評価を定着させた根拠を「作品の言葉と清少納言の営為に探り」、「学習者自身に自己の言葉と言語活動を振り返らせること」、それを通して、「枕草子」と出会うという学習活動の意義と目標が述べられている。中学校段階の目標として、まことに核心をついたものである。

本稿の教材分析の目標を、枕草子の評価を定着させた根拠を「作品の言葉と清少納言の営為に探る」ということに定めたい。

2-2 4系統の伝本の初段冒頭文

枕草子の諸本については、池田亀鑑による4系統2種類の分類がほぼ定説となっている⁸⁾。雑纂形態(三卷本系統諸本、伝能因所持本系統諸本)、類纂形態(堺本系統諸本、前田家本)の4系統本である。後掲表4は、4系統の伝本の初段冒頭文を一覧にしたものである。

表4 『枕草子』の諸本における初段「春」の段の本文

	初段「春」の段の本文 (下線は筆者が付記)
三卷本	春はあけぼの。やうやうしろく成り行く山ぎは、すこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。
能因本	春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

前田家本	<u>はるはあけぼの</u> 。そらはいたくかすみたるに、やうやうしろくなりゆくやまぎはの、すこしづつあかみて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。
堺本	春は <u>あけぼの</u> の空は、いたくかすみたるに、やうやう白くなり行く山のはの、すこしづつあかみて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたるもいと <u>をか</u> し。

枕草子初段の「春」の段は、三巻本、能因本、前田家本の3系統本は2文構成であり、堺本のみが1文で構成され、本文に多少の異同がある。しかし、4系統本ともに「春はあけぼの」が冒頭に置かれている。

池田勉(1975)は、「枕草子鑑賞(第一段)」を、「『春はあけぼの』この、句とも見える一文を口ずさむだけで、人々は、もう、枕草子の名を想起しやすことだろう。そして春の曙光に彩られゆく雲の、美しい形象を双眼に想い描き、めぐり訪れてきた季節の春を、なつかしく心に迎え入れることであろう。」⁹⁾と書き起こしている。枕草子初段「春」の段は、学年に異同はあるが、小・中学校ともに、全社の教科書に採録されており、特に「春」の段は暗唱している生徒も多い。「春はあけぼの」は、枕草子の名を想起させるにとどまらず、日本の四季の美しさに思いめぐらせ、物事の胎動する「はじまり」をも感じさせるであろう。枕草子の評価を不動のものにした要因のひとつに、「春はあけぼの」の魅力があることは間違いない。

本稿では、初段の教材分析をするにあたって、まず、冒頭の一文を複数の観点から分析していく。

2-3 冒頭文「春はあけぼの」の構造分析 —池田勉(1975)を手掛かりとして—

(1) 「春はあけぼの」は、「春はあけぼのこそ、をかしけれ」の省略か

「春はあけぼの」は、「春はあけぼの、いと、をかし」とか、「春はあけぼのこそ、をかしけれ」の省略であると解説することが多い。筆者もこれまでに、ほとんど無意識的にそのように教えてきたようにさえ思われる。しかし、省略と一見明快に解説することで、とてつもなく大切な何かを取り逃がしてはいしまいか。

池田勉(1975)は、省略説を、「文章にこめられた、表現の気魄というものを忘却した俗説にほかならぬ。『春はあけぼの』という文は、『春はあけぼの』でなければならぬという、絶対の判断を示しているのだ。動かぬ判断にもとづく立言という姿勢である。したがって、そこには、そのように判断して疑わぬ作者というものが、文章の背後に、表現の主体者として立っているのだ。」¹⁰⁾という。

「春はあけぼの」の一文は、「春はあけぼのこそ、をかしけれ」といった平板な陳述とは無縁の、「春のあけぼの」を春という季節の象徴として判断した作者の美的判断力の確かさを誇る気魄さえ感じさせる立言だと、池田勉は解しているのである。

本項では、この池田の理解を具体的に辿ることから、冒頭文の分析に取りかかりたいと思う。その上で、筆者なりの観点から「春はあけぼの」の分析を進めていきたい。

(2) 「春はあけぼの」の表現位相の高さ

「春はあけぼのこそ、をかしけれ」の文から、「こそ、をかしけれ」を省略したところで、「春はあけぼの」という文の保っている表現位相の高さと、きびしさは、決して生まれてはこない¹¹⁾、と池田勉は断言している。清少納言の表現意識のなかに、美的感覚にもとづく「感覚の倫理」「表現の倫理」という原点が存在し確立していて、これがこの表現位相の高さを生みだしているのではないかと池田は自説を展開する。池田が具体的に挙げた2章段を見ていきたい。

① 262段「関白殿、二月二十一日に法興院の積善寺といふ御堂にて、一切経供養せさせたまふに」

中関白家の栄華の極みを描いた長編の一段である。末文は、「されど、そのをり、めでたしと見たてまつりし御ことどもも、いまの世の御ことどもに見たてまつりくらぶるに、すべてひとつに申すべきにもあらねば、もの憂くて、おほかりしことどもも、みなとどめつ。」

この作者が、枕草子における主要な表現行為を、中宮のめでたさへの讃仰と尊敬という一点にしぼっていることは、明らかであって、(中略)その表現意識には、美しい中宮以外は文章による表現行為にのぼせないという(中略)「表現の倫理」とでも呼ぶべきものを、この作者は表現意識として確持していたのではなかったか。(中略)表現意識において、表現に価値することと、価値しないこととの識別の一線を、きびしく、そして潔く意識することこそ、作者にとって操守すべき『表現の倫理』とも名づけるものではなかったか。(後略)¹²⁾

② 97段「すべて、人に一に思はれずは、なにかはせむ。……二三にては死すともあらじ。一にてをあら

む。」

一のもの、「無上」のものを信条とし願望とするという、この作者のことばには、自分にとって、物の第一義のものを見出して行こうとする意欲の傾向が明らかにかがわれる。この人間的傾向は、「春はあけぼの」「夏は夜」「秋は夕暮れ」「冬はつとめて」というように、四季の季節がそれぞれに象徴される「一のもの」を提示し、表明してゆくという表現意識と、無縁のものではないように思われる。

「春は」「夏は」というように、提示する心とともに、提示することの自負の心のきらめきを見せる表現意識には、その背後に、「一にてをあらむ」と壮語する、この作者の人間的な個性の存在をのぞきみる思いに、私は誘われる¹³⁾。

初段「春はあけぼの」「夏は夜」「秋は夕暮れ」「冬はつとめて」という書き出しは、「四季の季節がそれぞれに象徴される『一のもの』を提示し、表明してゆく」という清少納言の「表現意識」、表現に価することと価しないことを厳しく選別するという「表現の倫理」に裏打ちされたものであるという池田勉の鑑賞は首肯できるものである。初段と、272段、97段を関連させて読むと、枕草子の主題、本質と、「春はあけぼの」の冒頭文との関係が見えてくる。

(3) 助詞「は」に着目した初段の表現法

初段と、「関は 逢坂。」「原は あしたの原。」といった、いわゆる類聚的章段とは、助詞「は」を共通に備えている。池田は、大野晋編『岩波古語辞典』の「基本助詞解説」から以下を引用している¹⁴⁾。

- (1) 「は」は提題の助詞と言われ、その承ける語を話題として提示する。
- (2) そして、下に、それについての解答・解決・説明を求める役割をする。
- (3) 「は」は、その受ける語を、肯定し、確信して提示し、下に、明確な解決を求める役目をする。
- (4) また、下の解決をも確実なものとして取り立てて示す働きがある。

さきにあげた「関は」「原は」の「関」や「原」は話題として、また歌枕の題として提示され、「は」の下に、関や原の名が、それぞれに列挙される。それらの名は提示された題のもとに求められた解答もしくは説明として受けとってよい。問いと答えとの関係である。(中略) 第一段の「春は」以下の文ともなれば、春・夏・秋・冬の四季の名は、季節として、肯定と確信をもって提示されている季題であるし、その下にあげられる「あけぼの・夜・夕暮れ・つとめて」は、それぞれにその季節の好尚を象徴する時刻のひと時である。好尚は美的判断にもとづいて、作者によって取り立てて立言されているのである。このように、もとは単純で実用的な「は」の機能を源泉として、誕生し、発育し、達成されてきたものが、枕草子の文学精神としての原型なのではあるまいか¹⁵⁾。

類聚的章段の「関は」「原は」については、提示された題とその解答である、つまり「問いと答えとの関係」であるという指摘は、これまでも多くなされてきた。「枕草子の文学精神としての原型」が助詞「は」の話題提示、その解答・解決・説明を求め、確実なものとして解決を求める機能を源泉としているのではないかという池田説は、枕草子が書き始められ、書き貯められていくプロセスを想わせるものである。

(4) 初段は作者の構築した「感覚」の世界である

池田勉(1975)は、古今集と徒然草の間にある枕草子の位置について、以下のように論じている。

古今和歌集の上巻は、春夏秋冬の部立てを定め、その季節の風物の進み移りゆく時間の流れを和歌の一首一首をつらねて、絵巻物のように構成してみせた。それに比べれば、枕草子の四季の絵は、自然の美しい形象に、人事の動きを添えて、四季の空間の緊張を描いてみせてくれる。そして後の徒然草の作者は、「春暮れてのち、夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気をもよほし、夏より既に秋はかよひ、秋は即ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅もつぼみぬ。」(155段)と説いて、流転の哲理を思考した。古今集と徒然草との間に位置して、枕草子の作者の構築した「感覚」の世界も、また人間の創造しえた見事な文明であったといわねばならぬ¹⁶⁾。

先に本章1節で引用した、『中学校国語3』(学校図書)単元「発見する言葉—枕草子」の解説にも述べ

られていたが、枕草子を古今和歌集で示された感受性の型からの拡大という面から捉え、現代の文学までの流れの中に置いて見ようとする視点がある。池田勉は、古今和歌集上巻の春夏秋冬の部立てを、「その季節の風物の進み移りゆく時間の流れを和歌」をつらねて絵巻物のように構成してみせたという。それに比べて、枕草子は、「四季の空間の緊張」を清少納言の「感覚」で、瞬間として切り取り描いてみせた。そして、徒然草には、「流転の哲理」を見ている。枕草子単体として作品の特性を捉えるのではなく、古今・枕・徒然といった作品と比べることで、枕草子の特徴がさらに際だってくる。

池田は言及してはいないが、中世和歌、新古今集、芭蕉の俳諧への流れもある。文学の流れの中に置いて枕草子を読むという方法は、中学校・高校では、必要になってくる。今後、より詳細に具体的に考察していきたい観点である。

2-4 「あけぼの」という語に着目して

本節では、「あけぼの」の語誌に着目して、分析をすすめていく。

(1) 「あかつき」と「あけぼの」

『日本国語大辞典 第二版』¹⁷⁾から、「あかつき」と「あけぼの」の語誌を中心に引用する。語誌とは、「一つの語の起源や、語形・意味・用法などの変遷を記述したもの」である。

「あかつき」

あか-つき【暁】〔名〕（「あかとき」の変化した語）

① 夜半過ぎから夜明け近くのまだ暗いころまで。未明。また、夜明けに近い時分。現在では、明け方のやや明るくなった時分をいう。

語誌 (1) 上代には「あかとき」で、中古以後「あかつき」となって今日に及ぶ。もともとは、夜を三つに分けたうちの「宵」「夜中」に続く部分をいったが、あける一歩手前の頃をいう「しのめ」、空が薄明るくなる頃をいう「あけぼの」が、中古にできたために、次第にそれらと混同されるようになった。
(2) 中古では「あかつき」は歌・散文の双方に用いられるが、「あけぼの」は基本的には文章語（中世和歌には多い）、「しのめ」は歌語である。通い婚の風俗では、「あかつき」は男が女と別れて帰る時限であり、「あかつきの別れ」などの表現もある。一方、男が訪れるのは「よい」であり、「よいあかつき」と熟した例も見られる。

「あけぼの」

あけ-ぼの【曙】〔名〕

① 夜がほのぼのと明けはじめる頃。暁の終わり頃で、朝ぼらけに先立つ時間をさすという。あけぼのけ。

語誌 (1) 「日本書紀」の訓に「会明（アケホノ）」とあるが、仮名散文では「蜻蛉日記」の用例が最も古く、和歌では「万葉集」から三代集まで用例がないので、どの程度奈良時代の訓を伝えているか、問題が残る。

(2) 和歌では、「源氏物語一手習」に「袖ふれし人こそみえね花の香のそれかとにほふ春の明ほの」という浮舟の詠歌が古い。「枕草子」の影響とみられるが、「永久百首」に「春曙」の題が設けられ、院政期以後、次第に歌語として用いられる頻度が高くなった。

(3) 用いられる季節は春が多いが、必ずしも春に限定されることなく、「夏のあけぼの」「冬のあけぼの」など、また「須磨のあけぼの」という歌句も出現した。時間的に重なる「あかつき」が聴覚に関わることが多いのに対して、視覚に関わった例が多い。

「あけぼの」は中古にできた語であり、「あかつき」の方が語としては古くから用いられていた。中古では、「あかつき」は歌・散文の双方に用いられるが、「あけぼの」は基本的には文章語であった。仮名散文では「蜻蛉日記」の用例が最も古く、和歌では「万葉集」から三代集まで用例がないという。「あかつき」は男と女とが別れて帰る時限であり、そういった情緒が漂う語句であったが、「あけぼの」は湿った情緒を連想させる語ではなかったといえる。「あけぼの」は、和歌世界から距離を置いた、随筆という新しいジャンルの冒頭文にふさわしい、新しい語であった。また、「春はあけぼの」と「春はあかつき」の語感を比べ

てみても、「あけぼの」には、優しいが静謐な、物事の始まりというひびきがある。江戸時代初期の『枕草子』の注釈書『枕草子春曙抄』（延宝二年<一六七四>七月十七日の跋）には、「はるは、よろづの物生ずる初めなれば、発端に書けり。此発端に、春は曙を賞していへる。少納言の心あらはれて、枕双紙一部の形容もこもり侍るべし。」¹⁸⁾と記されている。「あけぼの」の語は、「よろづの物生ずる初め」を想起させる語であった。現在の「時代の曙」といった表現にも通じるものである。

（２）歌語としての「あけぼの」

『歌枕歌ことば辞典 増訂版』には、「あけぼの」について次のように記されている¹⁹⁾。

あけぼの【曙】 夜がほのぼのと明ける頃。「暁」の次の時間にあたる。『枕草子』の冒頭「春はあけぼの」で有名だが、和歌では『万葉集』や三代集にはなく、『後拾遺集』の「花ざかり春の山べのあけぼのに思ひ忘るな秋の夕暮」（雑五・為善）はその『枕草子』の影響であろうか。その後、「風渡る軒端の梅に鶯の鳴きて木づたふ春の曙」（千載集・春上・実家）「花ぞ見る道の芝草踏み分けて吉野の宮の春のあけぼの」（新古今集・春上・季能）のように「春のあけぼの」をよむのが一般的であったが、「あけぼのや川瀬の波の高瀬舟くだすか人の袖の秋霧」（新古今集・秋下・通光）のように「秋のあけぼの」をよむこともまれにはあった。なお、『新古今集』に「あけぼの」の例が十三例もあるのは、同集の美の世界を明らかにする上で、注目せねばなるまい。

ここにも和歌では『万葉集』や三代集にはないことが記されている。その後、後拾遺集に一例あるがこれは枕草子の影響かとされている。次に和歌での例は、千載集までない。しかし、新古今集には13例あり、新古今の美の世界に大きく関わる語となっていることが分かる。

（３）代表的な古典作品における「あけぼの」の用例

『日本古典対照分類語彙表』で、「あかつき」と「あけぼの」の使用回数を調べ、以下にまとめた²⁰⁾。

「あかつき」……万葉 0、竹取 0、伊勢 0、古今 3、土佐 3、後撰 6、蜻蛉 5、枕 25、源氏 53、紫式部日記 7、更級日記 13、大鏡 2、新古 13、方丈 2、宇治拾遺 18、平家 21、徒然 2、合計 173、作品数 14

「あけぼの」……万葉 0、竹取 0、伊勢 0、古今 0、土佐 0、後撰 0、蜻蛉 1、枕 1、源氏 14、紫式部日記 0、更級日記 0、大鏡 0、新古 14、方丈 0、宇治拾遺 0、平家 3、徒然 1、合計 34、作品数 6

「あかつき」に比べ「あけぼの」の用例は、極端に少ない。枕草子においても、冒頭文のみの使用である。こういった点からも、「春はあけぼの」の冒頭文の新鮮さ、インパクトの強さが印象に残ったといえる。

おわりに

本稿では、枕草子初段を取り上げ、小学校・中学校の教科書への採録状況、学習内容、学習活動について調査を行った後、先行の古典文学研究の成果に学びつつ、新たに「あけぼの」の語誌という観点から考察を行った。小中高連携教材としての「春はあけぼの」の教材分析の一部は報告できたと考える。しかし、初段にはまだまだ考察すべき点が残っている。例えば、枕草子初段と紫式部日記の冒頭との比較²¹⁾、「秋」の段の「鳥」への着目²²⁾、初段の構造分析など、まだまだ整理しておくべきことがある。また、多くの授業実践報告がなされており、授業化についての考察も必要である。これらについては、稿を改めてまとめていきたいと考えている。

引用・参考文献

- 1) 坂東智子：「国語科教員養成課程で出会う『枕草子』」山口大学教育実践総合センター研究紀要第37号、45、2014の2）に詳述している。
- 2) 坂東智子：「国語科教員養成課程で出会う『枕草子』」山口大学教育実践総合センター研究紀要第37号、37-45、2014。「国語科教員養成課程で出会う『枕草子』(2)」山口大学教育実践総合センター研究紀要第38号、39-48、2014を参照ください。

- 3) 中嶋真弓：「小学校・中学校の古典学習の系統的指導：古文を中心に」愛知淑徳大学教育学会紀要第08号，2，2013。多くの先行研究が同様の指摘をしている。本橋裕美：「小中高連携教材としての『枕草子』」『小・中・高一貫教育において古典に親しませる教材とその指導法の開発』東京学芸大学人文社会科学系日本語・日本文学研究講座（代表河添房江），6-75，2012。麻生裕貴：「古典作品教科書掲載一覧」『小・中・高一貫教育において古典に親しませる教材とその指導法の開発』東京学芸大学人文社会科学系日本語・日本文学研究講座（代表河添房江），76-123，2012。
- 4) 3) の中嶋論文に同じ，3-4。
- 5) 浜本純逸ほか：『みんなと学ぶ 小学校 国語 五年上』（11学図・国語503）学校図書，110-115，2013。
- 6) 野地潤家ほか：『中学校 国語3』（11学図・国語922）学校図書，204，2013。
- 7) 学校図書出版編：『中学校 国語3 教師用指導書 教材研究編（下巻）』，46，2013。
- 8) 速水博司：「伝本の形態とその特徴」『枕草子大事典』勉誠出版，62-102，2001。
- 9) 松尾聰・永井和子校注・訳：『新編日本古典文学全集18 枕草子』小学館，476-477，1997。底本は三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本。本稿での枕草子本文の引用は全て新編日本古典文学全集による。
- 10) 池田勉：「枕草子鑑賞（第一段）」『枕草子講座2 枕草子とその鑑賞I』有精堂，106-107，1975。
- 11) 10) に同じ，107。
- 12) 10) に同じ，107-109。
- 13) 10) に同じ，110。
- 14) 10) に同じ，111。
- 15) 10) に同じ，111-112。
- 16) 10) に同じ，120。
- 17) 日本国語大辞典第二版編集委員会：『日本国語大辞典 第二版 第一巻』小学館，2000。
- 18) 神作光一：「春はあけぼの（第一段）」『枕草子大事典』勉誠出版，229，2001。
- 19) 片桐洋一：『歌枕歌ことば辞典 増訂版』笠間書院，5，1999。
- 20) 宮島達夫ほか編：『日本古典対照分類語彙表』笠間書院，2014。
- 21) 18) に同じ。
- 22) 上坂信男ほか：『枕草子（上）』講談社学術文庫，18-19，1999。